文字もじ MOJI の世界

30.「写植書体」その収集とアーカイブ

小林功二＊

筆者が共同代表を務める編集・デザイン会社「合同会社ランプライターズレーベル」では，2018年春から写植書体のアーカイブを行なっている。

2020年2月現在，収集した書体数は264書体となり，うちWebでは写研の手動写植書体・221書体を掲載している。

なぜ写植書体のアーカイブを行ない，Webで公開することにしたのか。もともとのきっかけを思い返すと，毎日コミュニケーションズ（現在のマイナビ出版）に在籍していた2008年，祖父江慎さん監修のもと，書体見本帳『フォントブック』2冊を担当したことだったように思う。通常であればメーカー別に短冊状の見本を並べるところ，「1書体あたり2ページのフォーマットにする」「メーカー順ではなくかたちごとに分類して並べる」「漢字とかなは別のものとして扱う」というコンセプトで作った。収集した書体（デジタルフォント）は，2008年時点であっても相当な量であっ

LampLighters Label の web サイト内にある
写植書体のアーカイブ
https://l-l-l.jp/wp/?p=1224

たが，これをまとめ終えたのち，「いつか写植や金属活字まで含めた，書体のデジタルアーカイブが作れないか」と考えるようになった。

写植書体を記録する重要性

実際に写植書体のアーカイブに着手したのはその10年後，2018年のことだった。

明確な理由があったわけではないが，活字活版〜写植〜デジタルフォントという流れで語られる書体・組版の変遷のなかで，どれほどがいまなお実働しており，情報・資料として残っているかを考えたとき，写植が空白地帯になりつつあるように感じた。

活字や活版印刷はその数こそ多くはないものの，その独特の質感，風合いもあいまって，現在もなお愛好されており，活字，活版印刷そのものも次世代へと受け継がれている。

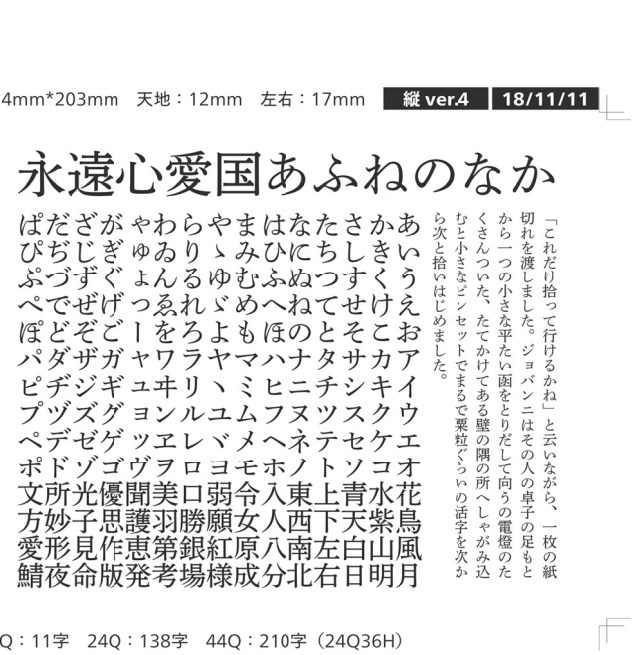
一方，写植に関しては，印字物そのものは版下用の素材であり，成果物ではないこともあってか，DTPに代替されて以降，振り返られることなく，その役目を終えていくように感じられたのだ。

しかし，現在のデジタルフォントには，写植時代に作られた書体をフォント化したものも多く（さらに遡れば写植書体が活字書体を元にしていたこともあるが），写植時代の書体をアーカイブしておくことは活字から写植を経てデジタルへと繋がる，書体の変遷を把握する上でも重要ではないか。そうしたそうした想いから，社のプロジェクトとして写植書体のアーカイブはスタートした。

手動写植の見本をどう集めるか

手動写植と電算写植，いずれの書体も収集する対象となっていたが，第一の目標は「写研の手動書体のアーカイブ」に設定した。

手動写植印字にあたっては，株式会社ホーエイ（東京）に相談をしたところ，写研書体であればおよそ9割程度の書体が収集できることがわかった。



見本フォーマット。作成にあたっては祖父江慎さんに助言をいただいた

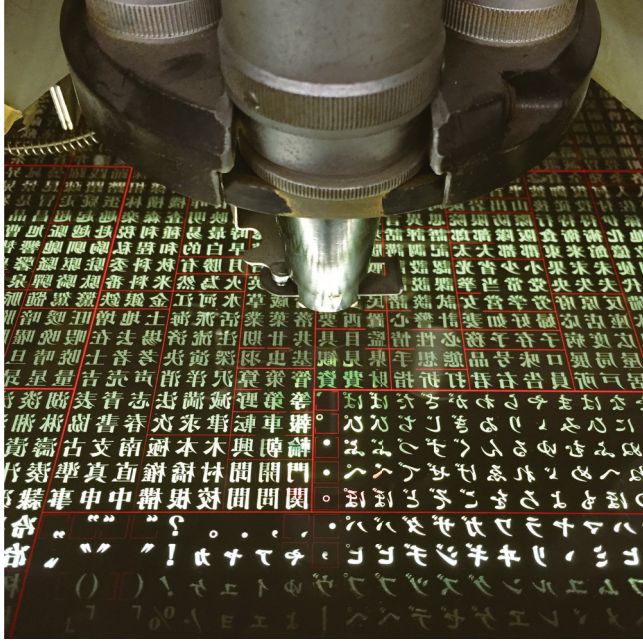
すべての書体を印字するには相当量の印画紙と写植作業が必要になるが，印画紙については写真用印画紙で代用することにした。写真用印画紙での印字にあたっては数種類の写真用印画紙を持ち込み，幾度ものテストを行なった。

この点については筆者が東京綜合写真専門学校の講師をしていることもあり，印画紙の手配や現像の工夫について相談がしやすかったという点も大きい。

結果，ハイコントラスト（硬調）な写植用印画紙に比べると，現在の写真用多階調印画紙での印字は，コントラストこそやや下がるものの，資料としてアーカイブするには十分なクオリティだと判断。指定のフォーマットをすべて手動写植で打ってもらう，アーカイブ作業が始まった。

ホーエイ所有の文字盤の印字が終了した後は，不足書体の文字盤を購入して持ち込むなどを行なった結果，かなの大きさの違い（KLとKSなど）を除いて，写研の手動写植見本帳に掲載されている和文書体のほとんどを収集することができた。

印字した印画紙はスキャンしたのち，文字をトレースできないサイズにてWebで公開をしてい



SPICA-QD（上）と秀英明朝・SHM の文字盤をセットした状態（右）

る（なお，公開にあたっては写研に確認を行なった）。

現在は手動写植の不足書体（大蘭明朝体 UM-C，ナカミンダ B-I，今宋等）の文字盤捜索を進めながら，電算写植の見本収集を進めている。

手動写植機 SPICA の導入

写植書体のアーカイブを進めるなかで，「写真植字を実働状態で保存する」というもうひとつの目的が思いがけず実現した。打ち合わせで訪問した印刷会社に使われていない写植機（写研の手動写植機「SPICA-QD」）があったのだ。

相談の結果，文字盤を含めて譲っていただくことになり，2019（平成 31）年 4 月 30 日に事務所に運び込むことになった（図らずも平成最後の日に昭和 48 年製の写植機を引き取り，令和の時代に受け継いだことは感慨深い）。

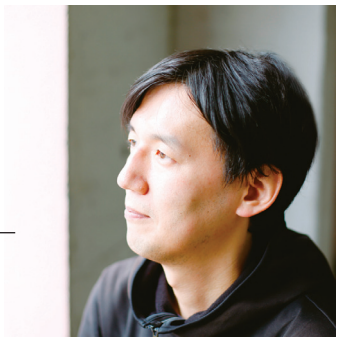
暗室のある環境に事務所をおいていることもあり，現像設備は整っていた。あとは約 45 年前の写植機が果たして使えるのかどうかが問題だったが，幸いにも心配は杞憂に終わった。清掃や軽微なメンテナンス，手配できる範囲での消耗品を行なった結果，基本的な機能も問題なく，無事に印字できることがわかった。

文字盤から文字を探し出す作業については，文字盤上の文字に座標を割り当て，テキストとの対照表を作成。テキストデータに検索・置換をかけることで漢字に文字盤座標を付記することにした結果，職にされていた方には到底及ばない速度ながらも，一定のスピードで印字ができるようになった。

引き取った SPICA-QD はマイコン制御になる以前の機種ということもあり，大きな故障さえなければこの後，長く使えるのではないだろうか（文字盤や写植資料の収集も続けていく予定）。

写植書体の収集と実働状態の維持，このふたつを続けることが書体・組版の流れのなかでどの程度の意義を持つのか。現状ではわからないが，微力ながらも資料として後世に残せることを願うばかりである。

（手動写植印字にあたって多大なご協力をいただいた株式会社ホーエイの平川正洋さん，土屋祥一さんに心より御礼申し上げます。）



＊ KOBAYASHI, Kouji
LampLighters Label
編集者
k@l-l-l.jp